臨床報告

更年期女性の動悸・冷えに対し 桂枝加竜骨牡蛎湯が奏効した 1 症例

松本 大樹 木村 容子 佐藤 弘

東京女子医科大学東洋医学研究所, 東京, 〒114-0014 北区田端1-21-8

A Case of Palpitation / Coldness Successfully Treated in a Climacteric Woman with Keishikaryukotsuboreito

Hiroki MATSUMOTO Yoko KIMURA Hiroshi SATO

Institute of Oriental Medicine, Tokyo Women's Medical University, School of Medicine, 1-21-8 Tabata, Kita-ku, Tokyo 114-0014, Japan

Abstract

There have been some reports that keishikaryukotsuboreito improves climacteric symptoms such as palpitation, but none have reported coldness successfully treated with this formulation. We report a case of palpitation and coldness, successfully treated with keishikaryukotsuboreito.

The patient was a 48-year-old female. She complained of palpitation and coldness for 2 to 3 years. She had coldness of the hands and feet without hot flushes. She consulted our clinic on May 8, XXXX. We prescribed keishikaryukotsuboreito (7.5 g/day) because of suggestive symptoms of insomnia, as well as palpitation in the abdomen. Her symptoms improved in 2 weeks. Keishikaryukotsuboreito is usually prescribed for cold feet with hot flushes. The results experienced in this case suggest that keishikaryukotsuboreito may be effective for cold feet without hot flushes, especially with palpitation and pulsation at the navel, which are known symptoms of *qi* counterflow in Kampo medicine.

Key words : coldness, palpitation, keishikaryukotsuboreito, climacteric disorder

要旨

更年期女性の動悸に対し、桂枝加竜骨牡蛎湯が有効であった症例は報告されているが、冷えに対する効果に言及した報告は認めない。今回動悸と冷えに対し、桂枝加竜骨牡蛎湯が速やかに奏効した症例を経験したので冷えを中心に考察を加え報告する。

症例は48歳、女性。2-3年前より動悸、手足の冷えが出現し、X年5月8日当院を初診。虚証で動悸と不眠を訴え、腹診所見の腹部動悸から、桂枝加竜骨牡蛎湯7.5 g/日を投与したところ、服用2週間で動悸、手足の冷えが改善した。1年後に5 g/日と減量したが、症状は落ち着いている。

今回の症例では、臍上悸を伴う動悸と手足の冷えに対し、桂枝加竜骨牡蛎湯が速やかに奏効した。桂枝加竜骨牡蛎湯はのぼせを伴う上熱下寒型の冷えに限らず、のぼせの訴えがない場合でも、動悸や臍上悸などの気逆によると考えられる所見を伴う手足の冷えには、桂枝加竜骨牡蛎湯を応用できると考えられた。

キーワード : 冷え、動悸、桂枝加竜骨牡蛎湯、更年期障害

緒言

更年期障害の愁訴として動悸は53.3%、冷えは62.3%と多く認められるものの¹⁾、西洋医学的に異常を認めることはあまりなく、漢方治療の適応となる場面は多い。更年期障害の漢方処方としては当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸の三大処方が49.5%の処方頻度を占め、桂枝加竜骨牡蛎湯は0.1%である²⁾。今回動悸・冷えなどに対し、桂枝加竜骨牡蛎

湯が速やかに奏効した症例を経験したので考察を加え報告する。

症例 : 48歳、女性

主 訴 : 動悸、手足の冷え、首筋から肩のこり、頭痛、不眠

既往歴 : 鉄欠乏性貧血

妊娠分娩歴 : 3 妊 2 産

月経歴 : 初経13歳、月経周期不順

表1 初診時血液検査所見

WBC	3600	/μL	T.Bil	0.8	mg/dL	Tchol	225	mg/dL
RBC	367	/μL	D.Bil	0.1	mg/dL	HDL	72	mg/dL
Hb	10.4	g/dL	GOT	14	IU/L	LDL	129	mg/dL
Plt	33.7	/μL	GPT	10	IU/L	TG	77	mg/dL
Ht	33.4	%	γGTP	10	IU/L	FBS	91	mg/dL
MCV	91	fL	ALP	158	IU/L	BUN	13.7	mg/dL
MCH	28.3	Pg	ChE	170	IU/L	Cr	0.61	mg/dL
MCHC	31.1	%	LDH	131	IU/L	UA	3.7	mg/dL
Fe	51	μg/dl	T.P	7.5	g/dL	CRP	0.01	mg/dL
			Amy	73	IU/L	Na	142	mEq/L
						K	3.9	mEq/L
						Cl	103	mEq/L
						Ca	9.8	mg/dL

現病歴：2～3年前より上記主訴が出現し、X年5月8日当院初診となった。動悸は特に夏の人ごみでひどく気分が悪くなる、頭痛は月経後にひどくなる、と訴えた。不眠に対してプロチゾラムを内服している。

自覚症状：食欲普通、二便正常、睡眠障害を認め、寝つきが悪く、よく夢をみる。問診票の記載では、暑がり、寒がり、手足の冷え、疲れやすい、不安感、頭痛、立ちくらみ、動悸、胃の不快感、眼痛、目の疲れ、目のくま、肩・首筋のこりを認めた。

現 症：身長155 cm、体重48 kg、BMI20.0。血圧134/84 mmHg、脈拍74回/分、体温36.0度。脈は浮沈中間、虚実中間証。舌は淡紅色で、舌苔を認めず、歯痕を認めた。腹部は、腹力中等度で、心下振水音と臍上に腹部動悸を認めた。腹直筋の緊張は認めなかった。

初診時血液検査所見（表1）では、軽度の貧血以外に明らかな異常を認めなかった。健康診断での心電図では不整脈などの異常は認めなかった。

臨床経過（図1）：疲れやすく、やや痩せ型であることから虚証と判断し、動悸と不眠や夢をよくみるとの自覚症状、および腹診所見の臍上悸から、桂枝加竜骨牡蛎湯エキス（ツムラ、7.5 g/日）を投与した。服用2週間で「動悸はおどろくほど止まった」と話され、手足の冷えも訴えなくなり、速やかな効果を認めた。当院での患者自身による自覚症状評価システム³⁾でも著明に改善していた（図2）。不眠に関しては、多夢は変わらないものの、眠気がなくなった。X+1年6月2日には桂枝加竜骨牡蛎湯を（5 g/日）に減量したが、以後も症状は落ち着い

図1 臨床経過

ている。

考察

桂枝加竜骨牡蛎湯は、桂枝湯に竜骨と牡蛎を加えたもので、精力減退、疲労を主訴とするものに用いるが、夜尿症、遺精、神経症、不眠症などにも用いる⁴⁾。今回の症例では、更年期障害と思われる症状に対し、桂枝加竜骨牡蛎湯単剤投与で、速やかに動悸と共に手足の冷えも改善した。これまでの症例報告^{5)~8)}を検索したところ、動悸に対し桂枝加竜骨牡蛎湯が著効した報告は散見するものの、症状に冷えの記載を認めても、冷えそのものへの効果に言及した報告は認めなかった。

まず、冷えを中心に考察する。『専門医のための漢方医学テキスト』の冷え症の項目では、冷えを3つの型に分類している。この分類に基づくと、本症例は、のぼせを認めない手足の冷えであるため、四肢末端型の冷えであると考えられる（表2）。四肢

図2 患者自身による自覚症状評価システムによる症状の変化
グラフ上に示した各症状の点数は、頻度と程度を点数化し総和したもの。

表2 冷えの分類

主要型	特徴
1. 全身型(真寒)	全身的な「寒」
2. 上熱下寒型	温熱刺激でのぼせ
3. 四肢末端型	レイノー様凍瘡

(専門医のための漢方医学テキストより)

表3 桂枝加竜骨牡蛎湯の古典における冷えの記載

出典	原文	冷えの部位
「腹證奇覧翼」	上熱下寒	冷えのぼせ
「方読弁解」	下焦冷	下半身の冷え
「金匱要略」	陰頭寒	陰茎の冷え
「建殊録附録」	軀中寒冷	全身の冷え

末端型の冷えは、血虚・瘀血によるものと分類され、処方として、四物湯、当帰芍薬散、当帰四逆加呉茱萸生姜湯、桂枝茯苓丸などが挙げられている。それに対し、桂枝加竜骨牡蛎湯は上熱下寒型の気逆による冷えに使用する方剤と解説されているため、本症例の四肢末端型の冷えとは使用目標が異なる⁹⁾。

近年の論説では、大塚敬節は、「桂枝加竜骨牡蛎湯証では、足が冷えて、のぼせるという症状を訴え

るものがある。臍部で動悸が亢進し、下腹部で腹直筋が突っばっているものがある。脈は浮大で弱いものと、弦小のものとある。」⁴⁾と述べている。冷えのぼせを使用目標に挙げており、上熱下寒型の冷えに用いるととらえられる。

古典では、和久田叔虎の『腹證奇覧翼』には「圖の如く臍上中脘の邊に動気つよく、小腹に弓弦を張たる如く引はるものあり。常に衝逆目眩の患ありて、上實下虚、上熱下寒、脈虚花なるもの、桂枝加竜骨牡蛎湯の證なり。」¹⁰⁾とある。「上熱下寒」は、冷えのぼせととらえられる。福井楓亭の『方読弁解』には、「失精の者に此方を用ゆへし。凡て失精の者は下焦冷に由て起る。故に湯火を以て腰を温め且毎夜臨臥三陰交に灸する寸は其夜患なし」¹¹⁾とある。「下焦冷」は、下半身の冷えととらえられる。吉益東洞の『建殊録附録』には「病者、物あるを覚ゆ。(中略)平居、軀中に寒冷あり、夏月と雖も、襪をつけて重衣す。(中略)間々久しく桂枝加竜骨牡蛎湯を服して稍効を取るものあり」¹²⁾¹³⁾とある。冷えへの効果は不明だが、「軀中に寒冷あり」と全身型の冷えを訴える症例が提示されている。しかし、東洞はこの症例に関し、「平居、苦寒して、夏月に襪をつけて衣を重ね、憂思悲恐するものは、これを諸病を兼ねるものなり。則ち証の確かなるものに非ず。」¹³⁾¹⁴⁾と述べ、この冷えや精神状態は他の病気の兼症としてあらわれるもので、証の確定的なものではないと

している。また、続けて「桂枝加竜骨牡蛎湯は主として、胸腹に動あり、上逆するものを治す。今上逆なくして之を用う。故に小功ありといえども全く癒えざるなり」¹³⁾¹⁴⁾と述べ、使用目標として、動悸と上逆の所見を重要視している。原典『金匱要略』血痺虚劳病篇には「夫失精家 少腹弦急 陰頭寒 目眩 髮落 脈極虚。朮遲為清穀亡血。失精脈得諸朮動微緊。男子失精 女子夢交 桂枝龍骨牡蠣湯主之」¹⁵⁾とある。「陰頭寒」は、陰茎の冷えと考えると、体の局所の冷えととらえられる。

以上から、古典における冷えの記載をまとめると、全身の冷えへの効果は不明だが、冷えのほせ、下半身の冷え、陰茎の冷えと様々な部位の冷えが記載されている(表3)。

しかし、本症例では、のぼせがない四肢末端型の冷えに対し、桂枝加竜骨牡蛎湯で速やかな改善を得た。上熱下寒型の冷えのほせに限らず、他の様々な部位の冷えに対しても応用範囲を広げられる可能性が示唆される。この冷えへの作用は、『漢方診療医典』に、「桂枝湯は、血行をさかんにし、身体を温め、諸臓器の機能をたかめる作用があり」¹⁶⁾と述べられており、本方の骨格である桂枝湯の温める作用そのものによる可能性が考えられる。また、気逆ととらえられる動悸や膈上悸を伴うことから、のぼせがなくとも気逆の改善に伴い、自覚のない温度差が是正され、冷えを感じにくくなった可能性も考えられる。

つづいて、膈上悸に着目し考察する。上述の近年の論説・古典において、腹証としての膈上悸が強調されている。本症例でも膈上悸をひとつの目標に投与したところ、自覚的な動悸も速やかな改善を得た。『腹証奇覧翼』には、「按ずるに此の方に龍骨牡蛎の二味を加えるは、動気衝逆を鎮るのみにして、其の餘皆桂枝湯本方の與るところ、陽を助けて榮衛を調え、衛気を平にして、気血相和して、諸證自から癒るもの。(中略)因て此方の用を弘るときは、特に失精家のみならず所謂虚劳鬱證、赤白濁、小児の胎驚夜啼客忤驚癇の等、證に随て試効あり。』¹⁰⁾と、竜骨牡蛎は動悸衝逆を鎮めるために加えてあると解説している。本症例でも竜骨と牡蛎の作用が動悸を鎮めたと考えられる。膈上悸は、桂枝加竜骨牡蛎湯の重要な使用目標のひとつと考えられる。

同書にはつづけて、基本は桂枝湯証であり、陽を

助けて榮衛を調え、衛気を平にして、気血を相和させる働きがある。また、失精家だけでなく、虚劳鬱症などに有効であると述べており、これより木村は、「桂枝加竜骨牡蛎湯は、桂枝湯証に鎮驚作用のある竜骨、牡蛎が加わったものと考ええると応用範囲が広がる」¹⁷⁾と述べている。本症例のようにのぼせがない場合でも、動悸や膈上悸などの気逆によると考えられる所見を伴う手足の冷えには、桂枝加竜骨牡蛎湯を応用できると考えられた。

結論

これまで、桂枝加竜骨牡蛎湯の冷えへの効果について言及した報告は認められない。今回の症例では、膈上悸を伴う動悸と手足の冷えに対し、桂枝加竜骨牡蛎湯が速やかに奏効した。桂枝加竜骨牡蛎湯はのぼせを伴う上熱下寒型の冷えに限らず、のぼせの訴えがない場合でも、動悸や膈上悸などの気逆によると考えられる所見を伴う手足の冷えには、桂枝加竜骨牡蛎湯を応用できると考えられた。

附記 本論文の要旨は日本東洋医学会第68回関東甲信越支部学術総会(東京、2011年10月)にて報告した。

文献

- 1) 水野正彦：標準産科婦人科学，172，医学書院，東京，1994
- 2) 西村公宏，村林奈緒，野田和彦，井田守，山脇孝晴，能勢義正：当科更年期外来における漢方治療，産婦人科漢方研究のあゆみ，20，33-36，2003
- 3) 木村容子，佐藤弘，新井信，飯山和郎，田中朱美：患者自身による自覚症状評価システムの臨床応用—診療情報のデータベース化—，日東医誌，55，337-342，2004
- 4) 大塚敬節：漢方診療三十年，106，創元社，大阪，1959
- 5) 盛岡頼子：女子医大雑話 典型的な症例，漢方の臨床，57，287-294，2010
- 6) 溝部宏毅：女子医大雑話 動悸に桂枝加竜骨牡蛎湯ほか，漢方の臨床，53，620-622，2006
- 7) 溝部宏毅：女子医大雑話 桂枝加竜骨牡蛎湯が有効だった3例，漢方の臨床，54，1433-1436，2007
- 8) 普天間朝拓：桂枝加竜骨牡蛎湯が著効した外傷性頸部症候群の1例，痛みと漢方，18，50-52，2008
- 9) 日本東洋医学会学術教育委員会編：専門医のための漢方医学テキスト，215-217，日本東洋医学会，東京，2009
- 10) 和久田叔虎：腹証奇覧翼二編，近世漢方医学書集成84，22-26，名著出版，東京，1982
- 11) 福井楓亭：方読弁解，近世漢方医学書集成54，368，名著出版，東京，1981

- 12) 吉益東洞：建殊録附録，近世漢方医学書集成11，276-277，名著出版，東京，1979
- 13) 栗島行春：建殊録—東洞医学の成果—，96-99，東洋医学薬学古典研究会，東京，1997
- 14) 吉益東洞：建殊録附録，近世漢方医学書集成11，287-289，名著出版，東京，1979
- 15) 張仲景：元鄧珍本金匱要略，1-16a，51，療原書店，東京，1988
- 16) 大塚敬節，矢数道明，清水藤太郎：漢方診療医典第6版，339-341，南山堂，東京，2001
- 17) 木村容子，佐藤弘：月経痛，月経周期異常に対する気剤による治療の試み—5症例の経験から—，日東医誌，57，453-458，2006